

日本リスク学会第 38 回年次大会プログラム
—予測困難な世界を拓くリスク学の可能性—

Program of the SRA Japan 38th Annual Meeting
—Exploring the Potential of Risk Science in an
Increasingly Unpredictable World—

会期：2025 年 11 月 7 日(金)～9 日(日)

会場：大阪大学 吹田キャンパス

主催：一般社団法人 日本リスク学会
The Society for Risk Analysis, Japan

共催：大阪大学 社会技術共創研究センター
大阪大学 感染症総合教育研究拠点



目次

大会趣旨	1
大会概要	2
発表	4
大会会場	6
大会プログラム概要	9
大会プログラム詳細	11
11 月 8 日(土)9:10~10:40	11
11 月 8 日(土)10:50~12:20	13
11 月 8 日(土)13:10~13:20	16
11 月 8 日(土)13:20~14:50	16
11 月 8 日(土)15:00~16:40	19
11 月 8 日(土)16:50~18:00	19
11 月 9 日(日)9:10~10:40	20
11 月 9 日(日)10:50~12:20	22
11 月 9 日(日)13:20~14:50	24
11 月 9 日(日)15:00~16:30	26

大会趣旨

予測困難な世界を拓くリスク学の可能性

パンデミックは落ち着いてきたものの、AI 技術の急速な発展や地政学的緊張の高まりなど、様々な課題は複雑に相互関連し、ますます予測困難な世界になっています。もともとリスク学はこうした事態にただ受け身をとるのではなく、自らの意思で積極的に乗りこなそうとする強い意志に基づいて発展してきたものです。そのためには、多様な学問分野をまたいで、理論と実践を結び付けながら進化していく必要があります。本学会特有の分野の多様性を生かし、個人から組織、社会全体に至るまで幅広い視点から、様々なリスクを議論できる場にしたと思います。

第 38 回日本リスク学会年次大会 実行委員長
岸本 充生

大会概要

1. 基本情報

(1) 期間

2025 年 11 月 7 日(金) 前日イベント

2025 年 11 月 8 日(土)～9 日(日) 年次大会

(2) 大会の構成

- 2025 年 11 月 7 日(金) 前日イベント

- ✓ 前日イベント(1)

「施設見学～世界最大規模の大型蓄電池システムの試験・評価と製品安全の今～」

日時: 2025 年 11 月 7 日(金)15:00～16:30

場所: (独) 製品評価技術基盤機構(NITE)大阪事業所

〒559-0034 大阪府大阪市住之江区南港北 1-22-16

内容:世界最大規模の多目的大型実験棟 NLAB の見学(屋外)と、製品事故の NITE 職員による紹介(屋内)

※事前に登録した人に限ります。

- ✓ 前日イベント(2)

「ELSI リスク洗い出し体験ワークショップ」

日時:2025 年 11 月 7 日(金)17:30～19:00

場所:大阪大学中之島センター 5 階 いのち共感ひろば

内容:新規技術の社会実装において、リスクが顕在化してから対応するのではなく、事前に多角的な視点からリスクを洗い出すプロアクティブなアプローチが求められています。また「守りたいもの」も狭義の安全や健康だけでなく、プライバシーを含む人権など広く考える必要があります。本ワークショップでは、こうした問題意識のもと、EU AI Act でハイリスク AI に分類される「人事採用アシスト AI」を題材に、倫理的・法的・社会的課題(ELSI)を参加者とともに探索します。「AI 面接官による一次選考の完全代替」「エントリーシート評価や感情スコアリングの補助利用」など、具体的なサブシナリオを設定し、どのような条件下で倫理的・社会的なリスクが高まるのか、ステークホルダーごとにどんな懸念が生じるのかを議論します。多様な専門性を持つ参加者の知見を掛け合わせることで、単独では見落としがちなリスクの発見を目指します。技術と社会の接点に関心をお持ちの方のご参加をお待ちしています。

- 年次大会

- ✓ 日時:2025 年 11 月 8 日(土)

8:30 受付開始(大阪大学 吹田キャンパス コンベンションセンター研修室)

9:00 開会式

9:10～16:40 企画セッション、一般発表(口頭)セッション、ランチミーティング、一般発表(ハイブリッド)セッション、一般公開セッション

16:50～18:00 表彰式・受賞者講演

18:20～20:00 意見交換会(大阪大学医学部附属病院 14 階 スカイレストラン)

2025 年 11 月 9 日(日)

8:30 受付開始

9:10～16:30 企画セッション、一般発表(口頭)セッション

16:40 閉会式

- ✓ 場所:大阪大学 吹田キャンパス コンベンションセンター
 - ✓ 大会ウェブページ:<https://www.sra-japan.jp/SRAJ2025-Web/>
 - ✓ 大会実行委員会
 実行委員長:岸本充生(大阪大学)
 実行委員:村上道夫(大阪大学)
 中久保豊彦(大阪大学)
 長門裕介(大阪大学)
 小林智之(関西学院大学)
 浦山郁(京都橘大学)
 永井孝志(農業・食品産業技術総合研究機構)
 大野浩一(国立環境研究所)
 平井祐介(製品評価技術基盤機構)
- 連絡先:taikai2025@sra-japan.jp

2. 参加費等

(1) 大会参加費

	早期申込	通常申込・当日申込
正会員	7000 円	8000 円
学生会員	2000 円	3000 円

※会員・非会員を問わず、企画セッションの筆頭発表者やコメンテータ等の登壇者で、当該セッションにのみ参加する方は、年次大会の参加費は無料となります。

※名誉会員は、発表しない場合での年次大会の参加費は無料となります。

※協賛団体の学協会員の方は、参加費は日本リスク学会の会員価格が適用された上で、参加できます。

(2) 意見交換会参加費

一般	6000 円
学生	3000 円

※2025 年 10 月 20 日(月)までに参加申込み限定。

発表

1. 発表テーマ

日本リスク学会年次大会では、環境・健康リスク、災害リスク、工学リスク、経済学・保険リスク、リスク認知とコミュニケーション、リスク分析・評価の方法、リスクマネジメントとリスク政策など、「リスク」に関連した発表をすることができます。

2. 発表の種類

本年次大会では、「企画セッション」「一般発表(口頭)セッション」「一般発表(ハイブリッド)セッション」の他に、「一般公開セッション」があります。

3. 企画セッション

企画セッションは、日本リスク学会の会員がオーガナイザーとして申請したセッションです。オーガナイザーが座長を務めます。1 件あたりの発表時間と質疑の時間の長さについては、オーガナイザーが決めることができます。PC はオーガナイザーがご準備ください。会場内のプロジェクターは HDMI と RGB (D-Sub15pin) に対応しています。

4. 一般発表(口頭)セッション

発表時間は 20 分【発表 12 分+質疑 7 分+交代 1 分】です。発表は Microsoft PowerPoint か pdf ファイルを用いて行って下さい。

PC(Windows)は大会実行委員会で準備しています。持参の PC を使う場合は、コネクターを入れ替えてご使用ください。会場内のプロジェクターは HDMI と RGB (D-Sub15pin) に対応しています。必ず動作確認をセッション開始前に行ってください。

5. 一般発表(ハイブリッド)セッション

ハイブリッド発表とは、1 分の口頭発表の後で、ポスター発表を行うものです。

(1) ポスターの設置について

ポスター会場は、11 月 8 日(土)8:30 に開放予定です。11 月 8 日(土)13:10 までに掲示してください。会場は、コンベンションセンター3 階ホワイエです。

ポスターを張り付けるパネルの大きさは、横幅 900 mm×高さ 2100 mmです。ポスターの大きさとしては、A0 サイズ(841mm×1189mm)を推奨しますが、パネル内に収まるならばどのような大きさでも構いません。

ポスター貼り付けに必要な文具は大会実行委員会が用意します。

掲載期間終了後、ポスターは速やかに回収をお願いします。11 月 9 日(日)12:00 以降にパネルに残っているポスターは、大会実行委員会で廃棄します。

(2) ハイブリッド 口頭発表について

会場は、コンベンションセンターA 会場(会議室 1)です。

発表時、「発表題目・著者・簡単な要旨」を記載したスライドを 1 枚だけ投射いたします。

発表用のスライドは事前に連絡した様式で提出してください。
PC(Windows)は大会実行委員会で準備しています。

(3) ハイブリッド ポスター発表について

ハイブリッドセッションでのポスター発表は、口頭発表の後で行います。ご自身のポスターの前でご発表ください。

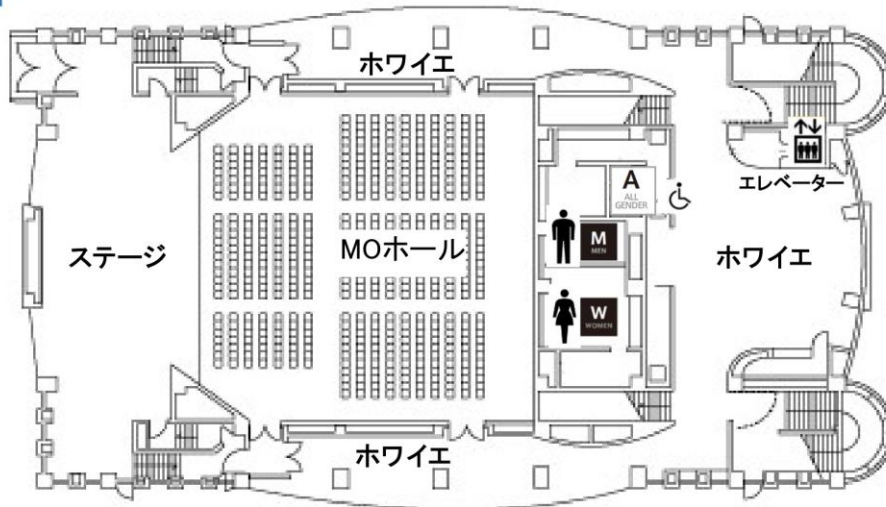
6. 大会優秀発表賞

2025 年 4 月 1 日時点で 40 歳未満の方が筆頭発表者として発表される場合は、大会優秀発表賞の候補となります。

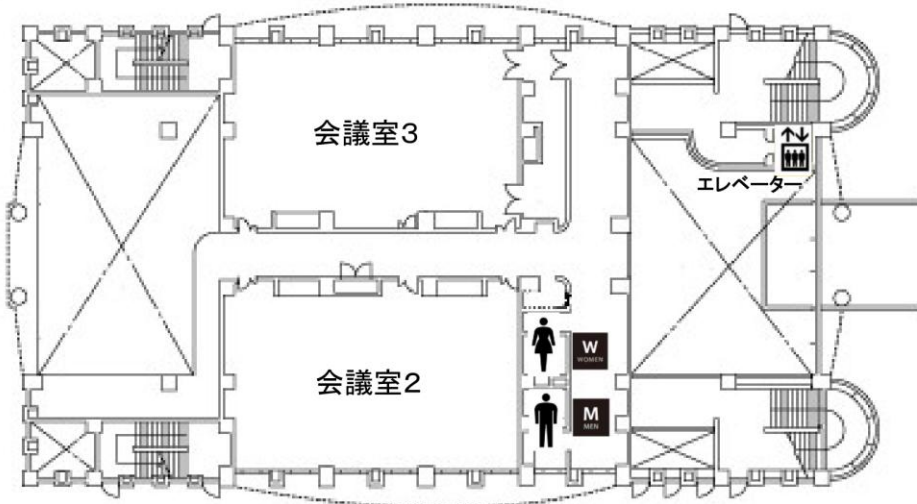
3. 会場見取り図

コンベンションセンター内見取り図

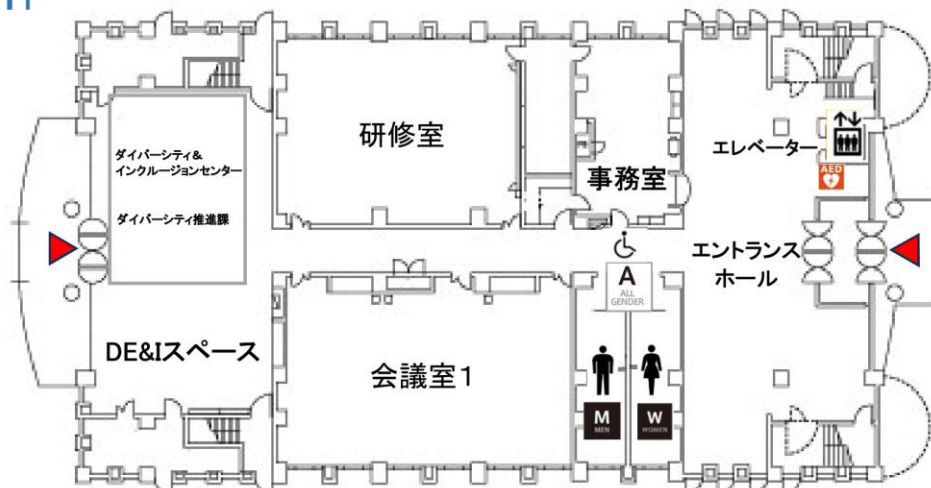
3F



2F



1F



4. 宿泊について

年次大会実行委員会では、宿泊先の準備はしていません。

5. 会場の利用について

(1) Wi-Fi の利用環境

キャンパス内では、eduroam を利用可能です。

(2) 休憩所

1 階の DE&I スペースを利用可能です。

(3) 昼食について

各自、ご準備ください。なお、キャンパス内では以下が利用可能です。

- ・セブン-イレブン(ポプラ通り福利会館内) 土曜日のみ
- ・セブン-イレブン(微生物病研究所内) 土曜日のみ
- ・工学部食堂 ファミール 土曜日のみ
- ・サブウェイ 阪大病院店 土曜日・日曜日
- ・スターバックスコーヒー 大阪大学医学部附属病院店 土曜日・日曜日

大会プログラム

1. プログラム概要

※2025 年 11 月 7 日(金)の前日イベントについては、2 ページ目をご参照下さい。

11月8日(土)

大阪大学吹田キャンパス コンベンションセンター

8:30-17:00

受付:研修室

	A会場(会議室1:定員120名)	B会場(会議室2:定員120名)	C会場(会議室3:定員120名)
9:00-9:10	開会式		
9:10-10:40	企画セッションA1 Current challenges from Social Sciences and Humanities in the Management of the Recovery Process after the Fukushima Accident (Session 1)	企画セッションB1 「AIエージェント」時代のリスクとガバナンスにおける論点整理	一般発表(口頭)セッションC1 リスクマネジメント
9:10-9:30	オーガナイザー:Michio Murakami	オーガナイザー:岸本充生	座長:藤井健吉
9:30-9:50	Tetsuo Yasutaka Ryoko Ando	岸本充生 工藤郁子 長門裕介 井出和希 鈴木怪一郎	金美善 村山武彦 赤淵芳宏 中山敬太
9:50-10:10	Tomoyuki Kobayashi Masaharu Tsubokura		
10:10-10:30			
10分			
休憩			
10:50-12:20 (※C2は10:50-12:40)	企画セッションA2 Future perspectives from Social Sciences and Humanities in the Management of the Recovery Process after the Fukushima Accident (Session 2)	企画セッションB2 マテリアル・リスクの予防的対応と解決志向型リスク管理への移行をめぐる統合的アプローチ —マイクロプラスチックと再生プラスチックを事例に—	一般発表(口頭)セッションC2 リスク評価
10:50-11:10	オーガナイザー:Michiaki Kai	オーガナイザー:中山敬太	座長:島田洋子
11:10-11:30	Jacques Lochard Thierry Schneider Myriam Merad Hiroko Yoshida	小野恭子 中山敬太 藤井健吉 平井祐介	齋藤駿介 鎌田柚 西森基貴 井上知也 岡崎豆
11:30-11:50			
11:50-12:10			
10分			
12:20-13:10	お昼休憩		
13:10-13:20	ランチミーティング		
13:20-14:50	一般発表(ハイブリット)セッション(司会:竹田宜人) 口頭発表:A会場(会議室1)、ポスター発表:ホワイエ		
休憩			
15:00-16:40	MOホール(定員300名) 一般公開セッション(司会:永井孝志) 三浦麻子 大竹文雄		
休憩			
16:50-18:00	A会場(会議室1) 学会賞・奨励賞・GP賞 表彰式・受賞者講演		
18:20-20:00	大阪大学医学部附属病院14階 スカイレストラン 意見交換会(懇親会)		

11月9日(日)

大阪大学吹田キャンパス コンベンションセンター

8:30-17:00

受付:研修室

A会場(会議室1:定員120名)		B会場(会議室2:定員120名)	C会場(会議室3:定員120名)
企画セッションA3		企画セッションB3	一般発表(口頭)セッションC3
除去土壌等の福島県外最終処分と復興再生利用:社会受容性評価と実現への課題		グローバルな化学物質管理のベストプラクティスを考える2	リスク認知
オーガナイザー:大沼進, 高田モモ 小林智之 鬼塚健一郎 相馬ゆめ 三成映理子		オーガナイザー:藤井健吉, 井上知也 岩下真純 井上知也 小野赫子	座長:小杉素子 林昭菲 桑垣玲子 前田恭伸 四塚朋子
休憩			
企画セッションA4		企画セッションB4	一般発表(口頭)セッションC4
調査公害について考える2		消費者はなぜハザードとリスクを混同するのか? ～バイアスの由来と対策を探る～	災害
オーガナイザー:小林智之, 村上道夫 本田香織 山本知佳 原裕太 山下良平		オーガナイザー:山崎毅 山口治子 畠山智香子 梶見孝 山崎毅	座長:大野浩一 李泰榮 菅原慎悦 金瀬米義 鳥居寛之 掛谷英紀
お昼休憩			
企画セッションA5		企画セッションB5	一般発表(口頭)セッションC5
知ってるようで知らない! ?～世界は基準値でできている～		「リスクコミュニケーションの評価の手引き」開発の進捗状況について	福島第一原子力発電所事故
オーガナイザー:平井祐介 藤井健吉 大野浩一 竹林由武 清水右郷		オーガナイザー:竹田宜人 土田昭司 桑垣玲子 堀越秀彦 静間健人 浦山 郁 藤井中 竹田宜人	座長:李泰榮 梶見孝 小林智之 伊藤浩志 宇野賀津子
休憩			
企画セッションA6		企画セッションB6	一般発表(口頭)セッションC6
大都市圏甚災害における共助の再構築、霧散する予防原則ー東京都江東5区の250万人の住民からの学会へのSOS		標準化とアカデミアとの連携	リスクコミュニケーション
オーガナイザー:臼田裕一郎, 久保英也 久保英也 李泰榮 奥村与志弘 臼田裕一郎		オーガナイザー:平井祐介 小太刀慶明 野口和彦 野田耕一 藤代尚武	座長:村山留美子 山口治子 竹田宜人 佐藤美佳 竹林由武
休憩			
閉会式			

2. プログラム詳細

 11 月 8 日(土)9:10~10:40

A 会場(会議室 1)

企画セッション A1: Current challenges from Social Sciences and Humanities in the Management of the Recovery Process after the Fukushima Accident (Session 1)
Organizer: Michio Murakami (The University of Osaka)

The “Social Sciences and Humanities in the Management of the Recovery Process after the Fukushima Accident Workshops” have been held since 2024, to strengthen the contribution of experts in social science and related science in reflecting on the recovery process following the nuclear accident.

The workshops have highlighted the importance of clarifying the role of SSH in the recovery process following a nuclear accident, examining improvements in individual and community life from multiple perspectives such as human, social, economic, cultural, and environmental, integrating these perspectives, promoting the development of experts, and developing effective decision-making methods. We will address issues in the post-nuclear disaster recovery process and discuss concrete actions for future progress through two sessions.

In Session 1, four presenters will discuss current issues in Fukushima, including collaborative activities with residents in Futaba Town, the waste management project of the Suetsugi community, community building with returnees and newcomers, and secondary health effects after the disaster. At the end of the session, participants will engage in discussion with the participants, incorporating comments from Michael Tichauer (ASNR) and the presenters in Session 2.

A1-1 Tetsuo Yasutaka, Yumiko Kanai, Momo Takada, Shinko Fujii (National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST)): Collaborative Activities with Returnees, Farmers, and Former Residents of Futaba Town

A1-2 Ryoko Ando (NPO Fukushima Dialogue and Doctoral Course and Open University of Japan): The Waste Management Project of the Suetsugi Community after the Fukushima Accident

A1-3 Tomoyuki Kobayashi (Kwansei Gakuin University): Internal migrants as contributors to recovery in post-disaster Fukushima

A1-4 Masaharu Tsubokura (Fukushima Medical University School of Medicine): Indirect Health Impacts of Nuclear Disasters and the Challenges of Shelter-

in-Place: Lessons from Fukushima and Noto and Ongoing Efforts in Nuclear Host Communities

B 会場(会議室 2)

企画セッション B1: 「AI エージェント」時代のリスクとガバナンスに関する論点整理 オーガナイザー: 岸本充生(大阪大学)

特定の目標を達成するために最適な手段を選択して様々なタスクを自律的に遂行する「AI エージェント」が人口に膾炙しており、社会実装も進んでいる。本企画では、AI エージェントが引き起こす可能性のある様々なリスクのうち、生成 AI(特に大規模言語モデルの利用)について指摘されているリスクとは異なる、あるいは、それらを増幅させるものを中心に議論する。例えば、ホテルのダイナミックプライシングと宿泊予約 AI エージェントが組み合わせることで、瞬時の価格高騰や大量の予約キャンセルが発生し、市場秩序の不安定化を招く可能性がある。このように、市場の仕組みと相互作用した結果としてリスクが増幅される現象は「迷惑系 AI エージェント」と名付けることができる。同様の現象は、チケット予約、限定品販売、営業活動(「アポ取り」)など幅広い領域に拡張しうる。本企画では、このような、AI と人間がネットワーク化することで生じるリスクを中心に、特有のリスク特性を指摘したうえで、リスク評価枠組み、技術的ガードレール、制度設計、商慣行、利用者リテラシーといった複数の観点から対応の方向性を検討する。

B1-1 岸本充生(大阪大学): AI エージェントの普及に伴うリスクの概論

B1-2 工藤郁子(大阪大学): 「迷惑系 AI エージェント」のリスク特性に関する概観

B1-3 長門裕介(大阪大学): AI エージェントによる価格交渉の倫理的リスク

B1-4 井出和希(大阪大学): 迷惑な振る舞いと AI エージェント、エージェント型 AI

B1-5 鈴木径一郎(大阪大学): 「生成 AI 依存」をいかに語るか〜リスク論的アプローチへの期待〜

C 会場(会議室 3)

一般発表(口頭)セッション C1: リスクマネジメント 座長: 藤井健吉(花王株式会社)

C1-1 金美善(大阪大学): 大学における研究リスクマネジメントの現状-研究セキュリティ・インテグリティを中心に

C1-2 村山武彦, 古賀マリア(東京科学大学): PFAS 問題に関する個別事例への社会的対応

C1-3 赤渕芳宏(明治学院大学): 環境法律の「事故時の措置」に基づく災害・事故による化学物質の異常放出への法的対応

C1-4 中山敬太(早稲田大学): 生成 AI 技術をめぐるリスクと不確実性に対する法的制御の意義と可能性
—EU と日本の AI 規制に関する制度比較の観点から—

11 月 8 日(土)10:50~12:20

A 会場(会議室 1)

企画セッション A2: Future perspectives from Social Sciences and Humanities in the Management of the Recovery Process after the Fukushima Accident
(Session 2)

Organizer: Michiaki Kai (Nippon Bunri University and Radiation Effects Association)

This session will follow Session 1. In Session 2, three presenters will discuss future prospects based on the Fukushima nuclear accident, including the implementation of the co-expertise process, societal and ethical challenges for the application of the international system of radiological protection, decision making for decontamination activities, and management of forests in the difficult-to-return zone. At the end of the session, there will be a discussion with the participants, incorporating comments from Michael Tichauer (ASNR) and the presenters in Session 1.

- A2-1 Jacques Lochard (Nagasaki University and ICRP): The implementation of the co-expertise process in the recovery of major nuclear accidents: ethics of radiological protection in practice
- A2-2 Thierry Schneider (ICRP – Nagasaki University - CEPN): Lessons from the Fukushima Daiichi NPP accident: Societal and Ethical Challenges for the Application of the International System of Radiological Protection
- A2-3 Myriam Merad (Paris Dauphine University/CNRS): Innovative Multi-Criteria approach for post-accident decision-making – Lessons from Fukushima and France
- A2-4 Hiroko Yoshida (Tohoku University and ICRP): Management of forests in the Difficult-to-Return zones: Toward the Restoration of the Environment and Livelihoods

B 会場(会議室 2)

企画セッション B2: マテリアル・リスクの予防的対応と解決志向型リスク管理への移行をめぐる統合的アプローチ—マイクロプラスチックと再生プラスチックを事例に—
オーガナイザー: 中山敬太(早稲田大学)

本企画セッションは、ナノ・マイクロプラスチック汚染や再生プラスチックなどを中心とする「マテリアル・リスク」を対象とする。これらの新興リスクは、科学的知見が十分に確立されていない段階では、リスク評価に基づく本質的対策を直ちに講じることが困難である。そのため、不確実性が大きい段階では、「予防的対

応」が重要なリスク管理手段となる。ここでいう予防的対応は、リスクが完全に解明されていない段階での、潜在的な被害の重大性を踏まえた暫定的・防御的な措置を意味する。

しかし、科学的知見の拡充やリスク研究の進展により因果関係や影響の大きさが明らかになっていけば、予防的対応はその役割を終え、「解決志向型リスク管理」へと移行することが可能となる。すなわち、リスク評価に基づき本質的な対策が見極められた段階では、「予防的」ではない具体的かつ持続的な管理政策が実施され、問題解決に向けた実効的な対応が展開される。

本セッションの新規性は、こうした「不確実性下の予防的対応」から「知見に基づく解決志向型リスク管理」への移行プロセスを、分離された知の融合を図る「文理融合型の統合的アプローチ」により具体的に議論する点にある。自然科学・工学によるリスク解明と、社会科学・人文学による制度設計や社会受容性の検討を組み合わせることで、総合知に基づく社会システムの構築を目指す。さらに、欧米諸国(特に欧州)では予防原則に基づいたオブジェクティブな予防的措置が比較的早期に導入される一方、日本では対応が遅れがちであるという課題もある。本企画セッションでは、欧米と日本の比較など諸外国の事例も踏まえて、環境リスク管理の観点から予防的対応と解決志向型リスク管理の連続性を再検討し、日本における持続可能なリスクガバナンス構築に資する道筋やその強化方策を探求する。

したがって、本企画セッションは、VUCA 時代における不可避となる新興リスクに対し、「不確実性下の予防的対応」と「知見に基づく解決志向型リスク管理」の移行を支える「総合知」の枠組みを提示するものである。

B2-1 小野恭子(産業技術総合研究所): プラスチックに由来する新たなリスクへの対応方法の検討

B2-2 中山敬太(早稲田大学): 不確実性を伴うマテリアル・リスクをめぐる人文・社会科学的アプローチ
ナノ・マイクロプラスチック汚染に対する段階的管理・規制の観点からー

B2-3 藤井健吉(花王株式会社): リスク課題における予防原則から事前警戒型管理への移行

B2-4 平井祐介(製品評価技術基盤機構): エマージングリスクに対する解決志向リスク評価に関する一考察

C 会場(会議室 3)

一般発表(口頭)セッション C2: リスク評価

座長: 島田洋子(京都大学)

C2-1 齋藤駿介(製品評価技術基盤機構), 川村大伸(名古屋工業大学): Vulnerable Consumer のリスクアセスメント合理化に向けた年齢別日常生活事故リスクの比較

C2-2 鎌田柚(農業・食品産業技術総合研究機構), 村藤義訓(農林水産省動物検疫所), 早山陽子, 近藤園子, 山口英美, 松山亮太, 山本健久(農業・食品産業技術総合研究機構): 輸入検疫で摘発された豚肉製品におけるアフリカ豚熱ウイルス遺伝子の検出に関連する要因の解析

C2-3 西森基貴, 長谷川利弘, 若月ひとみ, 戸田悠介, 細谷幸恵, 久城真代(農業・食品産業技術総合研究機構), 須賀晴久(岐阜大学): 日本におけるムギ類赤かび病菌の分布とその変化に関する気候的要因の解析

C2-4 井上知也(みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社), 大野浩一, 小池英子(国立環境研究所): 包括的健康リスク評価指標の提案と化学物質リスクの物質間・経年比較・リスクトレードオフ解析ービ

スフェノール類を用いた日本人集団のケーススタディー

C2-5 岡崎亘, 金子昌史, 北内英章, 中村真人, 山田剛司(エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ株式会社): 植生等の違いによる林野火災の延焼への影響

11 月 8 日(日)13:10~13:20

A 会場(会議室 1)
ランチミーティング
司会:村上道夫(大阪大学)

編集委員会からの報告が行われます。

11 月 8 日(土)13:20~14:50

口頭発表: A 会場(会議室 1)、ポスター発表: ホワイエ
一般発表(ハイブリット)セッション
司会: 竹田宜人(北海道大学)

- H1-01 保高徹生(産業技術総合研究所/北海道大学), 岩崎雄一(産業技術総合研究所), 竹田宜人(北海道大学), 松田裕之(横浜国立大学): ヒグマによる活動別リスクの試算
- H1-02 片桐律子, 福島麻子, 林多恵, 岩崎圭, 霜島雅明(化学物質評価研究機構), 今井英志, 南田憲宏(シヤチハタ株式会社): 2 液混合スプレー製品使用時の吸入ばく露におけるリスク評価
- H1-03 永井孝志(農業・食品産業技術総合研究機構): 殺虫剤の代替シナリオによるリスク低減効果の評価: 全国環境基準点と標準シナリオの分析
- H1-04 青木幸生(大阪大学), 青木菜々子(佐賀大学), 中久保豊彦, 東海明宏(大阪大学): DALY による中鎖塩素化パラフィンの室内暴露のリスク評価
- H1-05 戸敷浩介, 永野ひかる(宮崎大学), Enkhdul Tuuguu(National University of Mongolia), 内藤博敬(静岡県立農林環境専門職大学): モンゴル国ウランバートル市周辺の草原における鉛汚染リスクに関する研究
- H1-06 水野敏明(滋賀県琵琶湖環境科学研究センター), 小倉拓郎(兵庫教育大学), 島本多敬(滋賀県立琵琶湖博物館), 山内啓之(立命館大学), 八反地剛(筑波大学), 濱口貴仁(滋賀県立琵琶湖博物館), 小林亜美, 角川咲江(西堀榮三郎記念探検の殿堂), 片山大輔(滋賀県道路公社), 小林勇介(立命館大学): 19 世紀の河畔林の水制工「猿尾」による洪水減災効果—滋賀県愛知川扇状地を事例として—
- H1-07 今泉圭隆, 小山陽介, 鈴木規之, 中島大介, 高澤嘉一(国立環境研究所): 災害・事故時の環境リスク情報システム D.Chem-Core のアクションリサーチによる課題の抽出と改善
- H1-08 小山陽介, 今泉圭隆, 中島大介, 高澤嘉一, 鈴木規之(国立環境研究所): 化学物質事故への対応を想定した机上演習における事故類型別の特徴と効果の分析
- H1-09 秦寛夫, 鈴木由紀夫, ハイロ バスケ スンティアゴ, 井上和也(産業技術総合研究所): 気候変動による対流圏オゾン濃度変化の物理化学的な要因解析
- H1-10 井守洋佑(Boston University): 再保険とキャットボンドを中心とする ILS、ならびに公的災害基金の役割と補完性に関する実証分析

- H1-11 中山敬太(早稲田大学): 自然災害に伴う有害災害廃棄物をめぐる複合リスクへの対処のあり方に関する一考察—平時のリスクコミュニティ形成と BCP・PRTR 連携の観点から—
- H1-12 塩谷尚正(梅花女子大学), 袋井美里(兵庫教育大学): 大阪北部山間地域における社会関係資本と防災行動の関連の調査
- H1-13 小杉素子(静岡大学), 福島洋, 栗山進一, 佐藤健, 佐藤翔輔, ゲルスタ コリア, 大類真嗣, 北村美和子, 藤本慎也(東北大学), 尾島俊之(浜松医科大学), 岩本萌(東北大学), 遠峰良美(株式会社キヤンサースキャン): 防災コミュニケーション学の取り組み
- H1-14 竹林由武(福島県立医科大学), 齋藤玲, 保田真理, 邑本俊亮(東北大学), 伊東尚美, 坪倉正治(福島県立医科大学), 中野篤(日本防災士機構), 佐藤美佳(福島県立医科大学): 放射線防災研修の参加経験と防災士の放射線に関する知識および懸念の関連: 横断研究
- H1-15 相馬ゆめ, Quentin Ehkirch, 上原礼央奈(北海道大学), 中澤高師(東洋大学), 辰巳智行(豊橋創造大学), 有馬淑子(京都先端科学大学), 大沼進(北海道大学): なぜ除去土壌は受け入れられるのか: 仮想シナリオを用いた集団討議実験データの定性的分析
- H1-16 高田モモ(産業技術総合研究所), 村上道夫(大阪大学), 大沼進(北海道大学), 保高徹生(産業技術総合研究所): 焼却残さの減容化シナリオに対する市民と専門家の選好の違いと管理期間情報が市民の選好に及ぼす影響
- H1-17 岡亮太郎(東京大学), 保高徹生, 高田モモ(産業技術総合研究所), 三成映理子(国立環境研究所), 斉藤拓巳, 戸田賀奈子(東京大学): 除去土壌等の最終処分・再生利用シナリオの経済的評価とその比較
- H1-18 大須賀健一(昭和女子大学), 竹林由武, 田巻倫明(福島県立医科大学): 原発再稼働地域における自治体職員と住民の福島原発事故の教訓の認知と原子力防災対策に関する認識の差異に関する研究
- H1-19 藤長愛一郎(大阪産業大学), 村山留美子(神戸大学), 岸川洋紀(武庫川女子大学), 内山巖雄(ルイ・パストゥール医学研究センター): 原発事故後の住民とのリスクコミュニケーションに重要な要素 - 福島県伊達市住民へのインタビュー調査のテキスト解析 -
- H1-20 松永妃都美, 渡辺智子, Stephan Takeshi Terada, 柏崎佑哉, 折田真紀子, 高村昇(長崎大学): 2011 年の福島第一原子力発電所事故で発生した除去土壌の再生利用の受容に対する二極化
- H1-21 柏崎佑哉, 松永妃都美, 折田真紀子, 肖旭, 高村昇(長崎大学): 不確実性に対する不耐性とリスク受容性のリスクリテラシーへの寄与
- H1-22 村山留美子(神戸大学), 藤長愛一郎(大阪産業大学), 岸川洋紀(武庫川女子大学), 内山巖雄(ルイ・パストゥール医学研究センター): 原子力発電所のリスク認知に年齢はどのように影響するか?
- H1-23 山口さち子(情報通信研究機構), 村上道夫(情報通信研究機構/大阪大学), 多氣昌生, 大西輝夫(情報通信研究機構): 無線機器使用に関する健康影響への不安に関連する要因の検討
- H1-24 村田茉文, 八百山太郎, 村上健太(東京大学): リスクとベネフィットの認知的逆相関に関する再評価
- H1-25 山田拓翔, Emerson Gaw Escolar, 村山留美子(神戸大学): リスク認知の因子構造の再検討
- H1-26 浦山郁(京都橘大学/関西大学), 土田昭司(関西大学): コロナ禍におけるリスクの曖昧さへの認識の変化: 経時的調査における自由記述内容の再分析

- H1-27 伊原良奈(航空医学安全研究隊): 安全マネジメントシステムの観点に基づく計量テキスト分析の試み
- H1-28 張茵, 広田すみれ(東京都市大学): IPCC 第 6 次報告書発行前後での再生可能エネルギー報道の変化—内容分析による全国紙・地方紙の比較—
- H1-29 Takefumi Ueno(University of Shizuoka), Pedro Luís Carneiro Jovino (Universidade Estadual do Maranhão): Corporate Disclosure Responses to Sustainability Risks: A TF-IDF Based Analysis of 10-K Filings
- H1-30 井出和希, 岸本充生(大阪大学): エシカル／サステナブルファッションが包含する要素とは?—一般市民を対象とした質問紙調査
- H1-31 菰田昌生, 上野雄史(静岡県立大学): M&A リスクと企業の「のれん」の開示行動

11 月 8 日(土)15:00~16:40

MO ホール

一般公開セッション

司会:永井孝志(農業・食品産業技術総合研究機構)

プレナリー講演 1

三浦麻子(大阪大学): コロナ禍 4 年間を追うー30 波パネルデータが語るリスク認知の変化

プレナリー講演 2

大竹文雄(大阪大学): 新型コロナ対策のリスク

コメンテータ

藤井健吉(花王株式会社), 桑垣玲子(電力中央研究所)

11 月 8 日(土)16:50~18:00

A 会場(会議室 1)

表彰式・受賞者講演

司会: 大野浩一(国立環境研究所)

学会賞・奨励賞・グッドプラクティス賞の表彰式と受賞者講演を行います。

11 月 9 日(日)9:10~10:40

A 会場(会議室 1)

企画セッション A3: 除去土壌等の福島県外最終処分と復興再生利用: 社会受容性評価と実現への課題
 オーガナイザー: 大沼進(北海道大学), 高田モモ(産業技術総合研究所)

2011 年の福島第一原子力発電所事故により発生した約 1330 万 m^3 の除去土壌等は、現在、原発周辺の間貯蔵施設に保管されている。これらは 2045 年までに福島県外で最終処分される予定であり、低濃度の土壌は復興再生利用が予定されている。環境省は 2025 年 1 月、これまでの技術的検討を踏まえ、複数の処分選択肢を提示した。

我々は、2022~2024 年度の環境総合推進費による「県外最終処分・周辺地域の将来デザイン利用に向けた社会受容性評価と合意形成フレームワークに関する研究」を実施し、その成果を毎年リスク学会の企画セッションで継続的に発表してきた。今年度からは、より具体的な望ましいシナリオやプロセスを検討するため、新たな環境総合推進費「県外最終処分・再生利用のシナリオ及び候補地選定プロセスに関する社会受容性の評価および深化に関する研究」を開始した。本企画セッションでは、今年度開始した研究の現状を報告する。

- A3-1 小林智之(関西学院大学), 高田モモ, 白井浩介(産業技術総合研究所), 柴田侑秀, 大沼進(北海道大学), 保高徹生(産業技術総合研究所), 村上道夫(大阪大学): 復興再生利用の規模と県外最終処分の社会受容
- A3-2 鬼塚健一郎(京都大学), 鈴木薫(国立環境研究所), 保高徹生(産業技術総合研究所): NIMBY 施設に対する社会的受容性研究における質的研究の意義
- A3-3 相馬ゆめ, Quentin Ehkirch, 上原礼央奈(北海道大学), 中澤高師(東洋大学), 辰巳智行(豊橋創造大学), 有馬淑子(京都先端科学大学), 大沼進(北海道大学): 除去土壌県外最終処分における候補地数が議論の帰結に及ぼす効果: 仮想シナリオを用いた集団討議実験による検討
- A3-4 三成映理子(国立環境研究所), 高田モモ(産業技術総合研究所), 戸田賀奈子(東京大学): 県外最終処分および復興再生利用のシナリオとその重要ポイントの整理

B 会場(会議室 2)

企画セッション B3: グローバルな化学物質管理のベストプラクティスを考える2

オーガナイザー: 藤井健吉(花王株式会社), 井上知也(みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社)

本セッションでは、欧州グリーンディールやクリーンインダストリーディール政策を背景とするサステナビリティ志向の規制動向や、REACH 改正をはじめとする最新の化学物質規制の動向を取り上げる。加えて、国際的に進展するプラスチック汚染条約交渉、各国・地域の制度設計の差異、リスク評価手法の体系化・高度化、リスク管理措置の多様化といった論点を多角的に分析する。これらの潮流の背景と国際的な根源を明らかにしつつ、日本が直面する課題を整理し、責任ある化学物質管理に向けた解決志向のリスクガバナンス、ベストプラクティス、将来像を学際的リスク学の視座から議論する。

- B3-1 岩下真純, 藤井健吉(花王株式会社): EU における政権交代が化学物質規制に及ぼす影響
- B3-2 井上知也(みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社): Substance of Concern”を通じた欧州の化学物質管理規制の強化と統合化の動き
- B3-3 小野恭子(産業技術総合研究所): 欧州 ELV 規則案にまつわるレギュラトリーサイエンス

パネルディスカッション

座長: 藤井健吉(花王株式会社)

登壇者: 岩下真純(花王株式会社), 井上知也(みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社), 小野恭子(産業技術総合研究所), 蒲生昌志(産業技術総合研究所), 光崎純(製品評価技術基盤機構)

C 会場(会議室 3)

一般発表(口頭)セッション C3: リスク認知

座長: 小杉素子(静岡大学)

- C3-1 林昭菲, 加藤尊秋(北九州市立大学), 遠藤愛子(長崎大学): 消費者による瀬戸内海の海ごみのリスク認知と回収の考え方
- C3-2 桑垣玲子, 堀尾健太, 田中拓朗(電力中央研究所社会経済研究所), 橋本友範, 岡崎亘, 円居志津子(エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ株式会社): 先端発電技術のリスク認知に対する潜在連合テストによる検討
- C3-3 前田恭伸(静岡大学), Burhan Yunus Mamajiwala(ソミックマネージメントホールディングス): 自動運転車へのサイバー攻撃についてのエンジニアのリスク認知の調査
- C3-4 四塚朋子(追手門学院大学): 個人の主観的なリスク判断と交絡因子としてのリテラシー

11 月 9 日(日)10:50~12:20

A 会場(会議室 1)

企画セッション A4: 調査公害について考える2

オーガナイザー: 小林智之(関西学院大学), 村上道夫(大阪大学)

社会調査の増加や、調査の項目の過多および複雑化により、調査対象者に肉体的・精神的負担がかかる現象を調査公害と言います。調査公害は研究倫理上の深刻な問題であり、研究に携わる人は誰も無視できない問題です。

大きな災害が発生したとき、研究者や専門機関からの関心が高まり、いくつもの社会調査が一斉に行われることがあります。それら1つ1つの調査は、被災地の現状を知って、被災者の方々の支援につなげたいという動機で実施されるのかもしれませんが、しかし、たとえ正義感や優しさに基づく行動でも、実施を巡る思慮の浅さが調査の受け取り側に負担や迷惑をかける状況、すなわち調査公害を生みます。昨年の年次大会では、主に東日本大震災に焦点を当てて、当時の研究者らが見聞した調査公害について議論しました。調査公害の定義や体系的な対処方法は存在していませんでしたが、個人的な経験に基づきその改善に向けた提案がいくつも出されました。

本企画セッションでは、再び東日本大震災での調査公害を視野に入れつつ、発災から1年半以上が経った能登半島地震にも文脈を広げ、被災地調査の最新の状況を踏まえた調査公害について、コメンテータの清水右郷(宮崎大学)と会場の参加者とともに議論を行うことを目的とします。

A4-1 本田香織(東北大学): 健康と災害に関する研究倫理ー3.11 福島原発事故以降の調査研究からー

A4-2 山本知佳, 趙天辰, 阿部暁樹, 坪倉正治(福島県立医科大学): 能登半島地震における高齢者施設調査と「調査公害」への配慮

A4-3 原裕太(東北大学): 「合成の誤謬」が引き起こす調査公害のリスクと軽減策の検討

A4-4 山下良平(石川県立大学): 復旧・復興過程で必要な調査をすべき「真の主体」は誰かという問題

B 会場(会議室 2)

企画セッション B4: 消費者はなぜハザードとリスクを混同するのか?!~バイアスの由来と対策を探る~

オーガナイザー: 山崎毅(食の安全と安心を科学する会)

リスク学や食品安全を学ぶものにとってハザードとリスクの違いは明確だが、一般消費者はこれらを明確に切り分けせず、ハザードの毒性情報だけでリスクを過大評価するケースが多々ある。本セッションでは、この消費者による「ハザードとリスクの混同」という現象を採り上げ、リスク認知バイアスを補正するために、社会がどのような仕組みをもうけてリスク・リテラシー向上を目指すべきかを議論する。

B4-1 山口治子(愛知大学): 消費者はなぜリスクとハザードを区別できないのか

B4-2 畝山智香子(国立医薬品食品衛生研究所): 消費者への情報提供が不適切な事例の紹介

B4-3 楠見孝(京都大学): リスクリテラシー向上に必要なリスク教育とは

B4-4 山崎毅(食の安全と安心を科学する会), 山口治子(愛知大学): ハザードとリスクを切り分けるリスクコミュニケーション

C 会場(会議室 3)

一般発表(口頭)セッション C4: 災害

座長: 大野浩一(国立環境研究所)

C4-1 李泰榮(防災科学技術研究所): 地域コミュニティの防災活動における防災支援の実態と課題

C4-2 菅原慎悦(関西大学): 変化を促す触媒としての安全目標

C4-3 金瀬栄義(アシストエー合同会社), 前田恭伸(静岡大学): 「事業継続力強化計画(ジギョケイ)」災害後の有効性研究

C4-4 鳥居寛之(東京大学), 宇野賀津子(ルイ・パストゥール医学研究センター), 藤宮仁(株式会社ダイナコム): SNS 時代における生成 AI を活用した放射線リスク情報の発信

C4-5 掛谷英紀(筑波大学), 楠博(大阪歯科大学), 上島有加里(東京理科大学), 酒井亮太(埼玉医科大学), 岩本康志(東京大学): 浜松市・松戸市の COVID-19 ワクチン追加接種に関する安全性シグナルの検出

11 月 9 日(日)13:20~14:50

A 会場(会議室 1)

企画セッション A5: 知ってるようで知らない！？～世界は基準値でできている～

オーガナイザー: 平井祐介(製品評価技術基盤機構)

レギュラトリーサインタスクグループ(代表者永井、藤井、村上、小野、平井)は、2013 年、2014 年に企画した「知ってるようで知らない！？～基準値の根拠を探る～」の2025年版セッションを 10 年ぶりに新たに企画しました。このセッションでは、登壇者とコメンテータとの間での議論によって聴講者と一体となって基準値について考える機会を提供します。より具体的には、各登壇者は、「私の好きな/興味深い基準値」を挙げて「基準値によくある4つの特徴」である、①従来型の科学だけでは決められない、②数字を使い回してしまう、③一度決まるとなかなか変更されない、④法的な意味はさまざまである、を議論のポイントに発表し、「ブルーバックス 世界は基準値でできている(講談社、2025)」の4名の基準値オタクである著者(永井、村上、小野、岸本)等が講評する構成となっています。

A5-1 藤井健吉(花王株式会社/日本リスク学会): 「学習する基準値」への道: 毒性学的懸念の閾値(TTC)と国際レギュラトリーサイエンスの創造性

A5-2 大野浩一(国立環境研究所), 井上知也(みずほリサーチ&テクノロジーズ株式会社): 「環境基準等の設定に関する資料集」に関連する基準について

A5-3 竹林由武(福島県立医科大学): 精神疾患にまつわる基準値: 症状の持続期間の妥当性

A5-4 清水右郷(宮崎大学): 医学研究倫理の基準値

コメンテータ

永井孝志(農業・食品産業技術総合研究機構), 村上道夫(大阪大学), 小野恭子(産業技術総合研究所), 岸本充生(大阪大学)

特別コメンテータ

小太刀慶明(経済産業省)

B 会場(会議室 2)

企画セッション B5: 「リスクコミュニケーションの評価の手引き」開発の進捗状況について

オーガナイザー: 竹田宜人(北海道大学)

日本リスク学会リスクコミュニケーション事例研究タスクグループは環境省の放射線の健康影響に係る研究調査事業に参画しており、「効果的なリスクコミュニケーションの実践に向けた評価手法の開発の現状」とのテーマで令和 5 年から研究活動を行っている。その最終年度として、成果物である「リスクコミュニケーションの評価の手引き(以下、手引き)」の概要を説明し、今後の社会実装を見据えた、内容やそのアプローチへの検討を行う。

B5-1 土田昭司(関西大学), 竹田宜人(北海道大学), 桑垣玲子(電力中央研究所), 堀越秀彦(株式会社ペスコ), 藤井中(株式会社竹中工務店), 静間健人(京都橘大学), 浦山郁(立命館大学): 「リスクコミュニケーションの評価の手引き」開発の進捗状況について

具体的には、

- ・背景・趣旨: 桑垣玲子(電力中央研究所)
 - ・手引きの構成と概要: 堀越秀彦(株式会社ペスコ)
 - ・評価ポイントの名論と考え方: 静間健人(立命館大学), 浦山郁(京都橘大学), 藤井中(株式会社竹中工務店)
 - ・手引きの使い方(参加型評価)と社会実装: 竹田宜人(北海道大学)
- について話す。

C 会場(会議室 3)

一般発表(口頭)セッション C5: 福島第一原子力発電所事故

座長: 李泰榮(防災科学技術研究所)

- C5-1 楠見孝(京都大学), 三浦麻子(大阪大学), 小倉加奈代(岩手県立大学), 西川一二(大阪商業大学): 福島第一原発事故による食品放射能汚染と COVID-19 に対するリスク認知の比較: 15 波パネル調査データによる 14 年間の推移の検討
- C5-2 小林智之(関西学院大学), 竹林由武(福島県立医科大学), 村上道夫(大阪大学), 前田正治(福島県精神保健福祉協会): 福島原発事故避難指示区域への移住者におけるウェルビーイングと生活ニーズ
- C5-3 伊藤浩志(独立研究者): 弱者切り捨ては被曝リスクを増大させ社会全体の活力を失わせる ―福島原発事故の廃炉を進める上で求められる放射線対策―
- C5-4 宇野賀津子, 坂東昌子(ルイ・パストゥール医学研究センター), 内海博司(体質研究会), 一瀬昌嗣(合同会社一瀬研究所), 鳥居寛之(東京大学): 3.11 後に出版された放射線影響を語る書籍: 15 年目の検証

11 月 9 日(日)15:00~16:30

A 会場(会議室 1)

企画セッション A6: 急がれる大都市激甚災害に対応する共助の再構築—東京都江東 5 区の 250 万人の住民から学会への SOS

オーガナイザー: 臼田裕一郎(防災科学技術研究所), 久保英也(青森大学)

2011 年東日本(地震+津波)、2016 年熊本(地震)、2024 年能登半島(地震+豪雨・水災)と激甚災害は続く。そこから多くの経験や示唆を獲得、次の減災対策に生かしてきたが、これらは地方・郡部を中心に発生した。一方、都市部で発生した 1995 年の阪神淡路大震災は、その被災地の人口、企業などの集積が桁外れに大きく、公助の限界が露呈した。

大都市部で公助を補完するはずの肝心の共助は、ここ 30 年で住民のつながりの希薄化と自治会役員の高齢化による組織率の低下などにより、その推進力を急速に低下させている。

このような中で、桁外れに高い人口密集が「災害関連死」を激増させることは容易に想定され、大都市部での「新しい共助」づくりについて真剣に議論するタイミングに來ていると考えている。

そこで、本セッションでは、東京都江東 5 区、とりわけその中で最大の人口を抱える江戸川区を一つの題材に、「予防原則」に則り、大都市激甚災害への対応できる「新しい共助」の在り方・枠組みについて、提案、議論することを目的としている。その範囲は防災・減災の研究者に留まらず、リスクコミュニケーション、金融まで幅広く、分野横断&横串の当学会としての特性に合致する。同時に、それは学会の真価を問うテーマでもある。

A6-1 久保英也(青森大学): 大都市激甚水害に直面する江戸川区民から SRA-J への SOS

A6-2 李泰榮(防災科学技術研究所): 共助を動かす「ヒト」の育成とそのプログラムの在り方—防災士の見直

A6-3 奥村与志弘(関西大学), 久保英也(青森大学): 災害関連死の抑制は可能か

A6-4 臼田裕一郎(防災科学技術研究所): 令和 6 年能登半島地震後の防災対策の変革と大都市災害への適用可能性

B 会場(会議室 2)

企画セッション B6: 標準化とアカデミアとの連携

オーガナイザー: 平井祐介(製品評価技術基盤機構)

2010 年に明治大学で開催された年次大会のテーマ「現代社会に変革をもたらすリスクマネジメント—ISO の動きを踏まえて」から 15 年の歳月が流れました。また、ISO などの国際標準に携わる人材の育成や学会との連携の必要性について、経済産業省「標準化とアカデミアとの連携に関する検討会(2024 年 2 月設置)」にて、今年 5 月に「中間取りまとめ」が公開されています。このような過去の経験と新たな政策動向を受け、本セッションでは、本学会とリスク分析やリスクマネジメントに関する標準化(規格)を必要とする企業等との連携方策及び標準化人材の育成・活用を本学会内で議論していく下地を作ることを趣旨とし、外部から 4 名の有識者を招きます。

B6-1 小太刀慶明(経済産業省), 野口和彦(横浜国立大学), 野田耕一(日本規格協会), 藤代尚武(日本知財標準株式会社): 標準化戦略とアカデミアとの連携について

具体的には、

- ・新たな基準認証政策の展開 (日本型標準加速化モデル 2025)について(小太刀慶明)
 - ・リスクマネジメントの国際規格における位置付け(野口和彦)
 - ・わが国の標準化活動の現状について(野田耕一)
 - ・標準化活動におけるアカデミアと産業界との連携について(藤代尚武)
- について話します。

C 会場(会議室 3)

一般発表(口頭)セッション C6: リスクコミュニケーション

座長: 村山留美子(神戸大学)

- C6-1 山口治子(愛知大学): 情報ニーズに基づくリスクベネフィットコミュニケーションの効果検証ー食品添加物を例に
- C6-2 竹田宜人(北海道大学), 桑垣玲子(電力中央研究所), 土田昭司(関西大学), 堀越秀彦(株式会社パスコ), 藤井中(株式会社竹中工務店), 静間健人(立命館大学), 浦山郁(京都橘大学), 松永陽子(横浜国立大学): リスクコミュニケーション事例研究 TG の活動から見てきたもの
- C6-3 佐藤美佳, 竹林由武(福島県立医科大学), 保田真理, 齋藤玲(東北大学), 伊東尚美, 坪倉正治(福島県立医科大学), 中野篤(日本防災士機構), 邑本俊亮(東北大学): 防災士への放射線防災研修による放射線の知識とリスクコミュニケーションスキルの向上:コホート研究
- C6-4: 竹林由武(福島県立医科大学), 小林智之(関西学院大学), 村上道夫(大阪大学), 前田正治(精神保健福祉協会): 福島原発事故避難指示区域への移住者における放射線対策ニーズとリスクコミュニケーション